

トピックス		
1. 播州日誌	惻隱の情	上杉鷹山
2. 南国土佐を後にして		第 17 回



福留経営労務管理事務所
 姫路龍馬会
 保険労務士・行政書士

福 留 章

<h1>龍 馬 通 信</h1>	No. 73
	2024 年 1 月号

新年あけましておめでとうございます。

歳を重ねるごとに
 時の流れの早さが増す
 という話はよく聞く話
 今年は特にそれを切実に感じた



大宇宙の生命とエネルギーは
 大きな回転軸をゆっくりとまわして
 森羅万象を支配する
 その壮大きさに比べて
 ささやかな営みに過ぎない
 地球の人類の 愚かさを
 嫌という程見せつけられた昨年

ウクライナとロシア
 イスラエルとパレスチナ
 終わりの見えない戦争は
 拡大の一途をたどり
 周辺国を巻き込む懸念も

その他の地域紛争は十指に余る
 絶えることのない殺戮と怨念
 尊い命がかくも無残に奪われる現実
 核兵器使用の 引き金に
 人差し指が かかっている
 偶発的に起こりうる核戦争は
 つまり 世界の終末を意味する
 恐怖と絶望の中で 新年を迎えた



政権の崩壊を感じさせる
 裏金問題
 派閥解消は過去の遺物
 長期政権は必ず腐る
 そんな歴史的教訓が生かせない
 金と票しか頭にない政治家
 物欲と出世欲にかられた二世議員
 大企業一辺倒の 経団連
 国の為 国民のために
 命を懸ける救世主はいないのか

アイデンティティのない国は世界の
 笑いものになる
 アメリカの属国である日本に
 真の独立自尊は望めない

怒りを行動に変えよう
 国民主権を本物にするには
 どうしたらいいのか
 今立ち止まって 考えるしかない

明日という字は 明るい日と書く
 それを信じて……。



播州日誌

「惻隠（そくいん）の情」上杉鷹山

政権運営が危機的状況である。裏金問題。戦後 70 余年。改革を叫ばれながら結局は何の解決もできず今日に至った。自民党の一党独裁と、それを支える派閥政治。派閥解消の声はいつの間にか泡沫となって消えた。閣僚人事を始め、あらゆる政治の場面で派閥の論理がまかり通った。多くの人が集まる場合、より理想や思想の近い者同士が徒党を組むことは自然の流れと言える。要するに自民党独裁が長く続いたことによる一種の悪弊だ。そして驕り高ぶりも否定できない。選挙に勝つためにも入閣するにも、なるべく強大な力を持った派閥に属することがその近道になる。派閥内の大きな圧力に抹殺され、言論も封殺される。民主主義はかくも難しくその成果を上げるのに相当の時間を要する。

江戸中期、貨幣経済への移行に伴い、身分制度が形がい化し、商人が台頭した時代。全国の藩の財政が危機的状況に陥った。参勤交代は特に多額の費用を費やし、各藩の財政を圧迫した。さらに幕府から課せられる賦役もかなりのもので、武士階級の多くの者が借金を抱える事態に。豪商が多く派生し、大名の多くは豪商からの借財が頼みの綱であった。

山形米沢藩、第9代藩主、上杉鷹山は、他の藩よりも厳しい財政難の危機的状況の中でわずか 17 歳にして領主となった。石高 15 万石。上杉家の没落により 120 万石が時代を経て 8 分の一となった。越後上杉藩の 6000 人の家臣はそのままで財政悪化は必然であった。50 年にわたる改革はまさに艱難辛苦。血と汗と涙の連続であった。現場主義に徹し領内をくまなく歩き領民の声を聴いた。自らの生活を切り詰め一汁一菜、木綿の着用を義務付けた。側室を廃止、参勤交代や祝い事の簡素化、緊急時の備蓄米の確保。全藩士領民に藩の窮状を訴え自から先頭に立って鋤を持ち草を刈った。そんな領主の姿に領民は感動し、連帯した。その根底には上杉鷹山の「惻隠の情」が流れていた。惻隠とは貧しき人傷ついた人に寄り添いこれを扶けることを言う。多くの貧農に寄り添う藩主の姿はやがて水が沁み込むように領民の心にしみた。足を引っ張る重臣たちを思い切って断罪した。

「為せば成る 為さねば成らぬ 何事も 成らぬは人の 為さぬなりけり」の名言が生まれる。漆・楮・桑・藍や紅花の植栽、鯉の養殖、荒れ地の開墾、荒田の復旧。インフラ整備として多くの水路を開く。これは次世代へ向け 20 年の公共事業。興讓館（藩校）の設立。武士にも労働させ、武士の邸宅の庭に田畑。苦しみぬいた 50 年。貫いた再生と自立への道。鷹山が格闘した米沢藩の借金は、鷹山死去（1822 年）の翌年完済された。藩主自らが成し遂げた改革を当時の人は「米沢藩の奇跡」とよんだ。米沢織、漆器、紅花、鯉などは今も健在。そして何よりもこの地に「惻隠の情」が根づいている。

今の日本にいや世界中にも「上杉鷹山」はいない。いるのは金と票しか頭にない政治家と自分の出世と保身しか頭にない指導者と呼ばれるエゴイストばかりだ。

2023. 12. 25

第8回 社労士 野口 亮 がゆく

「先生、ちょっと相談が・・・」

訪問先に向かう車の運転中、携帯が鳴った。ハンドフリーの状態でも話を続ける。「休憩時間中の資料の荷受けは禁止しているのですが」運転手が新人さんで「どうしても先を急ぐので・・・」と懇願され、やむを得ずいつ



ものように荷受け作業を手伝っていたところ、誤ってパワーゲートの台車止めにつまづいて 1m ほど下へ転落、足の裏（両足）を強打。この時右足のかかとを不完全骨折。「どうしたらいいですか、労災で行けますか」とのこと。すでに病院には労災と告げて治療費の支払いはないとのこと。ルール無視や指揮命令の点で疑問は残るが「帰り道によりますので時間をください」と告げて、事故報告書（当事務所オリジナル）詳細情報を記入して送信するよう。事務所には5号様式の作成を指示した。訪問先からの帰り道、A社に立ち寄る。社長と総務の人に事情聴取する。どうやら休憩時間中の荷受けは禁止していたものの、運転手の要請で荷受けしてしまうことが、常態化していたようで月に数回は厚意で荷受けしていた模様。初めて来社した運転手ということもあって手伝ってしまったようだ。社長には「禁止かどうか改めて検討してください」「禁止するなら禁止を徹底して通達し、場合によっては労災が成立しないことを周知してください」と伝える。「指揮命令については、いちいちの指示はなかったものの現場での認識から「黙示の指揮命令」があったものとみなして業務災害扱いとした。チョットしたことでも不適用となることもある。気を付けなければ。」ありがとうございます社長の言葉に一安心。事務所に向かってアクセルを踏んだ。

創作 ショートストーリー 土佐のしばてん

土佐の高知に住み着いた妖怪、通称「しば天」。妖怪だけに一年中裸で過ごせる。いざとなれば人間に化ければいいのだが、そうすると人並みに風邪をひいたりする。年中人さまからの相談事に対応して、正義感を燃やし、世の為人の為に行動するが決して見返りを求めない。それがしば天のポリシーなのだ。年の暮れになると相談に乗るだけではなく、貧乏長屋の連中にわずかばかりの金銭を配ることにしている。不労所得だから与えすぎては、かえって毒になる。財源だがお金はいくらでも作れるのだが、この金は時間が来ると元の「枯れ葉」に戻ってしまう。だから一発勝負なのだ。それに正直者や地道に商いをしている人を騙すわけにはいかない。今年は悪徳高利貸しの徳兵衛に目を付けた。

ある日の夜、徳兵衛を待ち伏せて木の葉の小判を見せつけて「やい徳兵衛、小判の両替をかけて勝負せんかや」「お前が買ったら1割俺が買ったら十割」「おんしゃなんなら」「おらしば天よ」「徳兵衛すもとろ、とろうちや」欲に絡んだ徳兵衛上半身裸になって勝負、勝負。

力まかせの徳兵衛をすりすりすると、かわすしば天。そのうち目を回した徳兵衛、もんどりうって倒れ込む。十割をせしめたしば天、夜明け前の貧乏長屋を回って銭を配った。

わずかばかりの銭とはいえ、この年の暮れに奇様な人もいるものじゃと長屋じゅう大騒ぎ。鼠小僧のような義賊の仕業に違いないともっぱらの噂。「それでいいのだ」しば天はひとり合点した。何の見返りも求めない。これほど快いものはない。小屋の中で体を休めながら、大満足のしば天だった。

「貧しき人も富む人も、病む人も健やかなる人にも良いことの多い一年でありますように」



～南国土佐を後にして～

第17回 「東京編」 神田三崎町



2回生になって、学舎が三島から東京神田三崎町に移った。

法学部や経済学部の学舎が立ち並ぶ「学生の街」だった。神田三崎町は「本屋の街」でもあった。出版社や本屋が多く、古本の専門店もあり、多くの人が好みの本を探しに集まる街でもあった。

三島時代から決めていたことだが、千葉県船橋市に兄夫婦が住んでいて、その同じアパートの一室を借りることになった。通学は薬園台からバスで国鉄津田沼駅、そこから総武線で東京へ。御茶ノ水駅で山手線に乗り換え神田で降りる。ざっと1時間20分ぐらいだったと記憶している。今と違って国鉄時代、津田沼(写真)も船橋も小さな田舎の駅だった。

6畳一間に押し入れ、小さな台所（ガス台）風呂はなく共同の便所と洗面所。まあ一人暮らしだから不足はない。風呂はバス停一つ離れたところの銭湯に通った。1週間1〜2回。何よりも兄夫婦が同じアパートに住んでいるのは心強かった。兄からは「多少の援助はできるが、基本的にはバイトで稼げよ」と言われた。親からの送金は当てにならず、学費や生活費はバイトをして稼がなければならなかった。楽天家の私は、余りそのことが苦痛ではなく貧しさの中で一人暮らしを楽しんでいた。



ゼミに入るためにはクラブ活動をしなければならず先輩の導きで、新聞文章研究班（通称文研）に所属。偶に文章を書いて批評会でもまれた。1年後には阪本教授の坂本ゼミに無事合格した。この頃、文章に少し自信のあった私が「お山の大将」であった事に気づかされた。私程度の文章を書く人は、周りにごろごろ居たし、真剣に新聞記者を目指して頑張っている人もいた。文章に優しさリズムはあるが、強い芯のようなものに欠けるという評価は厳しかった。文研の同期の桜であった7人組は、皆仲良く文章の良し悪しについて批評し合うのはとても楽しいことだった。今でも手紙のやり取りをしている友人が何人かいて交流しているが、現役続行は私ぐらいのものだ。

当時、定期券は宝物のようなものだった。通学はもちろん、アルバイトや遊びに行くのにも重宝した。暑い寒い季節に限らず、わざと何も無いアパートに帰らず、電車で東京・千葉間を行ったり来たり、まるで冷暖房付きの書斎のようなものだ。多くの本を読んだし、うとうととすることもあった。

子供の頃から野菜がほとんど駄目だった。大根・人参・白菜・キャベツ・ごぼう・ネギなどほとんど食べることが出来なかった。神田三崎町は学生の街というだけあって学生向きの食堂やレストランが多くあり、質・量ともに学生にとってありがたいものだった。中華ならラーメン・ライス、そば屋なら大盛りの盛そば、洋食なら串カツ・豚カツ定食大盛り。豚カツは衣が大きく厚く肉は本当に薄く切っていた。付け合わせのキャベツがうまかった。いつの間にか野菜が食べられるようになっていた。貧乏学生だから「このキャベツを食べないと、栄養失調で死ぬ」というほどの勢いで、何一つ残さず食べる習慣がついた。まさに怪我の功名というところ。金のない時は学校周辺でA君、B君を探し当て、金を借りて飯を食った。会えない時は悲惨で、昼飯抜きの日もあった。空腹での受講は辛いものであったが空腹というもののピークを過ぎると、余り感じなくなるものだった。ちょっと負け惜しみだが、とにかくバイトする必要があるので講義のない日はバイトした。スポーツ新聞で求人広告をあさり、総武線市川駅近くの町工場でのバイトを始めた。バッテリー屋（正確な屋号は記憶にない）。仕事は中古や不良品の車のバッテリーから鉛部分をハンマーでたたいて分離させる仕事。それと鉛を外したバッテリーを粉碎機に欠けて粒状にしたプラスチックをスコップで袋詰めにする仕事。職場環境は劣悪で、粉碎機の騒音と舞い上がる粉塵のひどさには閉口した。当時はまじめな学生さんで、文句ひとつという訳でもなく一生懸命やるので仕事もはかどり、会社には喜ばれた。必ず風呂に入って煤（スス）を落とさなければ帰宅できないし、何しろ鼻の穴は煤で真っ黒だった。小さな風呂にうすくまるようにして体や髪を洗った。1時ごろから7時ごろまで。窓から見える太陽は粉じんのせいで黒い太陽だった。流石に、風呂になぜかお湯がなく、蛇口から出る水で体を洗った時には涙が出た。歯を食いしばっても体がガタガタ震えた。そんな辛いこともあったが、休憩時間のサンドウィッチとサイダーが何よりも楽しみだった。講義の合間を縫ってそのバイトは1年近く続いた。



冬季休業のお知らせ

12月28日（木）～1月4日（木）までです。

今年もありがとうございました。良いお年をお迎えください。